

地中の京焼

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 素地に楼閣山水文

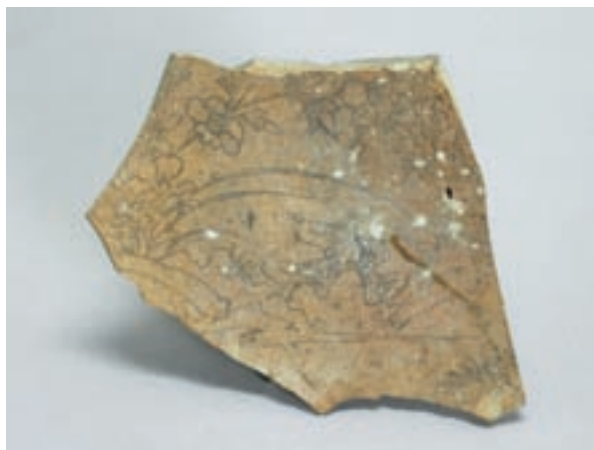


写真2 素地に牡丹・土坡文

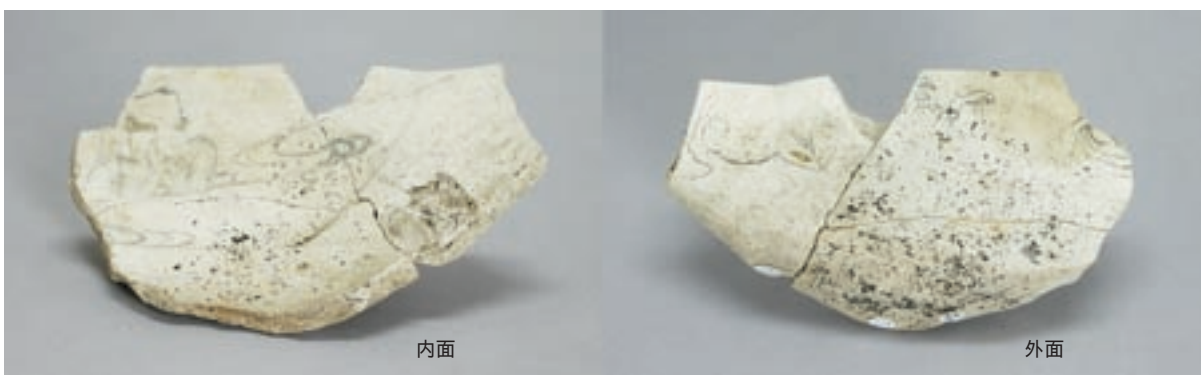


写真3 舟形をした大型の鉢の内面（山水文）と外面（波頭文）

はじめに 京焼といえば、精巧な技術、繊細な文様と艶やかな色彩で洗練され、焼物の粋ともいわれます。近年、地元の京都を始めとして江戸や全国の消費地遺跡からは、京焼出土の報告が相次いでいます。ブランド品としての京焼が、どのようにして、いつ成立したのか、地中から出土する京焼が注目されています。

仁清・乾山以前の京焼 これまで、初期の京焼の実態はよくわかっていませんでした。そこで注目されるのが、野々村仁清や尾形乾

山の作陶以前に成立していた、鉛系の釉薬を掛けて低火度で焼成した軟質施釉陶器です。これは仁清の御室窯以前に作られたことは間違いなく、仁清や乾山が色鮮やかな焼物を産み出すベースになったとみられます。この京焼の始まりを解明するには、仁清や乾山より遡るとされる押小路焼の実態を明らかにすることが重要となります。ここでは、その押小路焼の新資料を紹介します。

出土した押小路窯の半製品 京都市役所の西、中京区御池通柳馬

場東八幡町から、押小路焼関係とみられる江戸時代前期の遺物が出土しました。東八幡町の出土地点は、尾形乾山が『陶工必用』に、「一文字屋助左衛門なる人物が押小路焼を製造していた」と記した「押小路柳馬場ノ東」の南隣接地にあたります。

この調査では、白化粧・緑彩の碗、織部風の向付、茶入、香合、水滴、皿、碗などとともに、窯道具、釉薬を溶かした坩堝も出土しています。この中に、未施釉の素焼き陶片など、当地での陶器生産

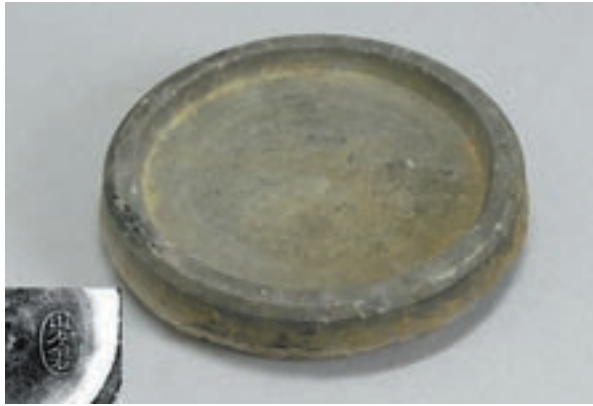


写真4 「岩倉」印のある高台



写真5 「音羽」印のある金彩色絵碗

を示すと考えられる遺物も多く含まれています。墨で文様を下描きした素焼き片や絵具をのせたもの、^{さびえ}錆絵で絵付けした素焼き香炉などがあります。加えて「音羽」「清閑寺」「清水」などの印銘をもつ高火度焼成の灰釉陶片や「岩倉」印銘の素焼き片も認められています。以下、おもなものを紹介していきます。

写真1は皿の素地で、内面底部には濃淡をつけた非常に細やかな楼閣山水文が墨描きされています。釉下彩の下絵です。写真2は大皿の素地で、内面全体に牡丹・土坡（小高く盛り上がった地面の起伏）などを流麗に描いた墨描きによる下絵があります。写真3は軟質施釉陶器の素地で、舟形をした大型の鉢と思われます。外面には布目痕が残っていることから型成形と推定されます。内外面ともに白化粧され、内面に山水文、外面には



写真6 埴埴

波頭文が墨描きされています。さらに、内面の下描きの墨に重ねて部分的に下絵具がのせられています。写真4は碗の高台部で、内外面ともに白化粧が認められます。高台内には小判形枠の「岩倉」銘の押印があります。これは高火度焼成の京焼碗とみられる半製品の陶片です。写真5は高火度焼成で小判形枠の「音羽」印銘をもつ金彩色絵碗です。これは製品として完成しているものとみられ、ここで絵付けされた可能性があります。写真6は釉薬を調合するのに用いたと思われる埴埴です。いずれも転用品と思われる、中国南方もしくは東南アジア産と思われる陶器が多くみられます。

発見された押小路焼 東八幡町の出土資料を検討した結果、当初、軟質施釉陶器を生産していた押小路焼は、色絵陶器の絵付けにその活動内容を変質させていったと考えられます。桃山時代に始まった軟質施釉陶器から仁清や乾山の完成された京焼に至る過程の物的資料が押小路窯の出土品であると思われます。以下に、その所見をまとめてみます。

1. 一部の乾山焼作品以外には

ほとんど知られていなかった釉下色絵の技法を用いた軟質施釉陶器の釉下色絵陶片が出土しています。

2. 墨で文様の下描きをしている素焼き陶片があり、その中には下描き線を色絵の具で重ね描きしているものも含まれていました。これらは釉下色絵陶器の半製品と考えられますが、のびやかな筆運びで描かれた山水や牡丹の絵は、押小路焼の製造に専門の絵師が参画していたことを推測させます。

3. 「京」「清水」「御菩薩」「音羽」「清閑寺」「岩倉」「岩水」「清」「寶」などさまざまな印銘をもつ多量の陶片があります。これらは押小路で上絵付けするために他窯の半製品が持ち込まれていることを示すものと考えられます。

4. 釉薬を溶かしたとみられる埴埴は、東南アジア方面で作られた壺であることから、海外から釉薬の原材料を輸入していた可能性をも窺わせます。

5. 押小路窯から出土した軟質施釉陶器には多くの器種があり、限られた器種を多量に作るよりも、多くの器種を少量に限定して価値の高い焼物を作る志向が強い京焼の姿がみてとれます。(小檜山一良)